

第12回

西宮湯川記念賞贈呈式



グスタフ・アドルフ皇太子(スウェーデン)より
ノーベル賞を授与される

平成9年11月13日 午前11時30分～12時
西宮神社会館

主催／西宮湯川記念事業運営委員会・西宮市・西宮市教育委員会

受賞者のプロフィール

◆受賞者



はつ だ てつ お
初 田 哲 男

- 昭和33年(1958)12月30日生 38歳
- 昭和56年(1981)3月 京都大学理学部卒業
- 昭和58年(1983)3月 京都大学大学院理学研究科修士課程修了
- 昭和61年(1986)3月 京都大学大学院理学研究科博士課程修了
(京都大学理学博士)
- 4月 高エネルギー物理学研究所物理系理論部
客員研究員
- 昭和63年(1988)4月 State University of New York at Stony Brook,
Physics Department Postdoctoral Research Fellow
- 平成4年(1992)10月 ワシントン大学 物理学科 助教授
- 平成5年(1993)10月 筑波大学 物理学系 助教授

◆受賞研究 「核媒質中におけるハドロンの動的構造の研究」

◆受賞理由

物質の基本構成要素であるクォークとグルオンは核子や中間子などのハドロン内に閉じ込められており単独では観測できない。しかしながら超高温、超高密度の極限状態では、クォーク・グルオンプラズマと呼ばれる新しい物質相が実現すると考えられている。

受賞者は、世界に先駆けて、この相転移の前駆現象としてクォークとグルオンの束縛状態であるハドロンの質量が、密度に比例して減少することを量子色力学に基づいて見出した。この現象は、現在CERN及びBNLで計画中の超相対論的重イオン衝突実験をはじめとするいくつかの実験計画で、観測できるものとして期待されている。

超高密度、超高温での物質の構造を解明する手がかりとして受賞者の業績は高く評価できる。

西宮湯川記念事業

湯川秀樹博士が、日本人として初めてノーベル賞を受けられた「中間子論」を提唱されたのは、苦楽園にお住まいの時でした。

それから50年を経た昭和60年に博士の門下生の方々が中心となって、「中間子論誕生記念碑」を苦楽園小学校校庭に建立されました。その碑文には、博士の著書「旅人」から「未知の世界を探究する人々は、地図を持たない旅人である」という言葉が、刻まれています。

西宮市では、これを契機に中間子論が本市で誕生したことを市民をはじめ内外に広く知っていただくとともに、文教都市西宮の誇りとしたいと考え、昭和61年から「西宮湯川記念事業」を実施しています。

この事業は、市民の方々に理論物理学を平易に解説し、基礎科学に対する正しい認識と、学生・生徒の科学する心を養うための「西宮湯川記念講演会」と、次の理論物理学を担う若手研究者の研究奨励を目的に、顕著な業績を修められた方に贈呈する「西宮湯川記念賞」、研究者による研究発表と討論のための「西宮湯川記念理論物理学シンポジウム」で構成されています。

この事業を通じて湯川博士の「真理を探究する心」と「平和への願い」が一層市民生活と教育実践の中に強く継承されることを念願しています。

湯川秀樹博士 略年譜

明治40年(1907)	父琢治、母小雪の三男として東京麻布に生まれる(1月23日)
昭和4年(1929) 22歳	京都帝国大学理学部卒業
昭和8年(1933) 26歳	苦楽園の新居に居住
昭和9年(1934) 27歳	中間子を予言。日本数学物理学会で講演、論文「素粒子の相互作用1」(中間子論第1論文)を投稿
昭和10年(1935) 28歳	同論文を日本数学物理学会欧文誌に掲載
昭和14年(1939) 32歳	京都大学教授となる
昭和15年(1940) 33歳	甲子園口に転居
昭和18年(1943) 36歳	京都に転居
昭和24年(1949) 42歳	核力に関する中間子理論によりノーベル物理学賞を受ける
昭和30年(1955) 48歳	ラッセル・アインシュタイン宣言の共同署名者となる。下中弥三郎氏・芽誠司氏らと世界平和アピール七人委員会を結成
昭和56年(1981) 74歳	京都下鴨の自宅で永眠(9月8日)



苦楽園小学校校庭に建立された「中間子論誕生記念碑」